

第2回新県立中央図書館DX検討に関する有識者会議 委員コメント内容

項目	主な意見
DX取組	<p><地域アーカイブ></p> <ul style="list-style-type: none"> ・国立国会図書館との違いを出すということを考えると、それぞれの地域で特色を出すことが重要 ・地域資料を作る市民活動を支援、地域資料のアーカイブ機能も重要という意味では、市民と一緒に作っていく機能を考える必要がある ・デジタルアーカイブをやるということは、保存できる場所が多く必要になるという覚悟がある ・静岡県立図書館が持つべきサービスは、静岡に関してなんでも分かるという図書館像 ・静岡のことについて調べようという時に、十分なスペックを持った検索システムが必要 <hr/> <p><交流スペース></p> <ul style="list-style-type: none"> ・静岡県の地域の人交流する場も重要 <hr/> <p><パーソナライズ></p> <ul style="list-style-type: none"> ・日本図書館協会が、図書館利用情報と個人情報の区別を明確にし、新基準を打ち出した。図書館利用情報の利活用が明示的に可となりつつある ・国会図書館ではやってくれないような、静岡県の図書館ならではのパーソナライズ ・一般の人が、実験システム等で後から公開できる部分が、システムの中で一部作れるとよい ・個人情報やプライバシーの保護という意味でのコンプライアンスを意識する必要 ・貸出履歴の活用等を敢えて明示し、より幸福度、クオリティオブライフが高まることを打ち出した新サービスに乗り出すのもひとつの戦略 <hr/> <p><認証システム></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ユーザーのモニタリングが重要、画像・映像認証による混雑状況の把握等 ・車番から情報を取得できる仕組みを提案の中に盛り込んでいただくことが理想的
開発・運用方針	<ul style="list-style-type: none"> ・従来のウォーターフォール型ではなく、繰り返して開発に戻れるようなものを取り入れるべき ・いきなりスクラム方式は非常に難しいため、ウォーターフォールに近い形を取り込むのが現実的 ・アジャイルと言いつつ、非常に大きな単位（サブシステム毎など）で回すやり方もある ・従来のウォーターフォール型ではなく、繰り返して開発に戻れるようなものを取り入れるべき ・どんどん良くしていくという姿勢を持ってやっていくことが大事、それができる契約形態にする ・アジャイルを採用する場合、少なくとも1人は専任体制が必要 ・システム開発そのものというよりは、計画検討のプロセスそのものがアジャイル的であること ・機動的に対応できる、作っていけるような要素を取り入れて、基本の部分と分けて構築する
事例調査	<ul style="list-style-type: none"> ・他県調査は、失敗したケースをしっかりと聞いていくのがよい ・ディスカバリーサービスは、地域コンテンツの扱い、サポート機能といった点を調査 ・ディスカバリーサービスを公共図書館で導入済みのところに聞いてもあまり意味がない ・ディスカバリーサービスは、大学図書館で導入が進み、おそらく最も進んでいるのが九州大学 ・データのアーカイブに関して、他都道府県がどうやっているか調査した方がいい